

書評

『野生チンパンジーの世界 [新装版]』

ジェーン・グドール著，杉山幸丸／松沢哲郎監訳
ミネルヴァ書房 2017年12月刊 9000円（税別）
（637ページ）

言わずと知れた，野生チンパンジー研究の歴史に残る名著である。この本を読まずしてチンパンジー研究者を名乗ってはいけない。本誌「霊長類研究」の読者の多くがすでにこの本の存在を知っていて，かなりの人は手にして目を通したことがあるだろうと思う。

原著は英語で，タイトルは「The Chimpanzees of Gombe: Patterns of Behavior」，発行は1986年だ。その日本語訳版の「野生チンパンジーの世界」の初版が発行されたのが1990年11月である。今回2017年12月に，新装版として復刊した。

1990年発刊の日本語訳初版と，2017年発刊の新装版とで，中身はまったく同じである。ページ数は同じく637ページだ。紙面の組み方も変わっていない。したがって，初版を持っておられる人は，あらためて新装版を買う必要はない。少しだけ，外見的な違いがある。新装版はスリムになった。表紙の紙などが変わって，薄くなっている。初版は箱入りだが，新装版は箱入りではない。私が持っている初版と新装版の重さを測ってみた。初版は箱入りの状態で2.00kg，箱から出した中身は1.84kgだ。新装版は1.51kgである。値段も安くなって，初版は12000円（税別），新装版は9000円（税別）である。分厚い大著であることには変わらないが，新装版は軽く，安くなって，少しお手軽になった。

私が大学生だったころ，初版の重い本を，大学院入試のための勉強もかねて読み通した。大きな本で，箱から出しても1.84kgなので，持ち歩いて気軽に読むには向いていない。下宿先の部屋にこもって何日かかけて最初から最後まで読んだのを覚えている。

このたび新装版が発刊された理由は，出版元ミネルヴァ書房の宣伝ちらしなどに書かれているが，あらためて私から出版社の方にメールで問い合わせたところ，「原著者のグドール先生が2017年”コスモス国際賞”を受賞したので，これを機に再度，宣伝を行い，今まで手に取ったことのない方にも知っていただき，販売したいということで復刊することになりました。」というお返事だった。

グドール博士はこれまでに2度，日本の大きな賞を受賞されている。1度目は京都賞である。1990年のことで，まさにこの年に日本語訳「野生チンパンジーの世界」の初版が出版されている。1990年は日本で国際霊長類学会大会が開催された年でもあり，グドール博士はこの年の京都賞のときと国際霊長類学会大会とで2

回来日して，それぞれ国内各所で講演された。

2度目の受賞が2017年コスモス国際賞である。公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会がおこなう事業で，「自然と人間との共生」というテーマに貢献するために設けられた。偶然にも，「野生チンパンジーの世界」の初版が発刊され，かつグドール博士が京都賞を受賞した1990年の同じ年に，大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」，通称花博がこの協会の出発点である。花博の理念を受け継ぐものとして国際花と緑の博覧会記念協会が発足し，コスモス国際賞の顕彰事業が実施されている。過去の実賞者で，霊長類研究者にもなじみ深い顔ぶれとしては，リチャード・ドーキンス博士，ジャレド・ダイヤモンド博士，デービッド・アッテンボロー氏，エドワード・ウィルソン博士などがいる。

コスモス国際賞受賞式のため，グドール博士は2017年11月に来日され，大阪や京都，東京で講演された。私は残念ながら別用で参加できなかったが，ひょっとすると本書評の読者のなかに講演を聞いた方もおられるかもしれない。

グドール博士の講演にはいつも感銘を受ける。私が最初にグドール博士の講演を聞いたのは，1994年だった。私が大学学部2回生のときのことだ。当時私は，将来の進路を決めかねていて，文学，生物学などを含めて，進路決断の参考にと機会があればいろいろな講演を聞いて回ったりしていた。理学部の掲示板にグドール博士の講演会のポスター見て，聞きに行ってみることにした。芝蘭会館でおこなわれた，比較的小規模の会だった。グドール博士は，チンパンジーの一般像を概説されるわけではなく，ゴンベに暮らすフローやフィフィやフロドのことを，個性豊かな固有の存在として描き出されていた。当時私は「野生チンパンジーの世界」を読んでいただけではなく，ほぼ知識がない中で参加したわけだが，そこで語られるチンパンジーの物語に引き込まれた。その後私が霊長類研究の道を歩むことになったきっかけのひとつである。のちに購入して読んだ「野生チンパンジーの世界」の中には，この講演で聞いたフローやフィフィやフロドのことがたくさん書いてあった。

1998年，私が大学院に進学して博士課程に進んだ1年目に，グドール博士が犬山のフロイデで講演をされた。すでに私はチンパンジーの研究を始めていて，興味深くグドール博士の話に聞き入った。ひととき印象的だったのは，その語り方である。大学院生の私にもわかる，比較的ゆっくりした速さで，明瞭に，よどみなく言葉が紡ぎだされる。日本語で言うところの「あの一」「えーっと」「まあ」というような，ごまかしのつなぎ言葉がまったくない。言い間違いもないし，主語と述語がつながらない文章もない。まるで用意周到に準備された原稿を読んでいるかのようなが，暗記し

たものを棒読みするわけではなく、その場で口から出てくる言葉を目の前にいる聴衆に語り掛けている。日本語訳にして600ページを超える「野生チンパンジーの世界」をひとりで書き上げ、熟考を重ねて膨大な文章を綴っていったその作業を通して、自分が語るべきことが頭の中で明瞭に整理されているのだと感じた。私には到底及ばない域だが、自分もいつかあのような講演ができるようになりたいと、いまだに心の中で目標にしている。

さて、本書の英語原題は、本書の位置づけとその後の方向性を示唆している。訳者あとがきを引用して紹介したい。「遠慮がちな原題, "The Chimpanzees of Gombe – Patterns of Behavior" (ゴンベのチンパンジー: その行動の型) は、この本の内容を明瞭に表している。そのすべてを書きつくしている一方、けっしてチンパンジー全体を書いたとは言っていない。」

アフリカ、タンザニアのゴンベという場所に暮らすチンパンジーたちについて、グドール博士が観察した行動についての記録と考察である。行動に焦点をあてているので、遺伝や生理のことはほぼ書かれていない。書かれているのは、ゴンベという調査地の様子、そこに暮らすチンパンジーの人口動態、個体間関係、社会構造、採食や狩猟、コミュニティ間の関係、道具使用についてである。25年の観察から得られたゴンベのチンパンジーたちの生き生きとした姿が描かれており、研究者だけではなく広く一般にも読んでいただきたい内容である。科学的に貴重なデータだけでなく、顔写真付きの紳士録（ゴンベのチンパンジーの個体紹介）も含まれている。

大部なため全体を要約することは難しいが、私が個人的に印象に残っている部分を3つ挙げることにしよう。1つ目はシロアリ釣りの道具使用である。グドール博士の功績は、ゴンベに住むチンパンジーの全体像を包括的に明らかにしたことであるが、道具使用の発見は彼女の研究の最初の成果と言ってもよいだろう。本書545ページに、グドール博士が1960年11月に最初にチンパンジーのシロアリ釣り道具使用を目撃した時の日記が引用されて記述されている。また、そのときのシロアリ塚の写真も掲載されている。世界のチンパンジー研究の歴史にとって記念碑的な文章と写真である。2つ目は、チンパンジーの行動に関する多様な記載である。本書のどこを開いても、その開いたページの左右どちらかに写真やグラフがあると言えるほど、視覚的に分かりやすい。チンパンジーが見せる多様な友好的行動、攻撃的行動が、多くの写真と分かりやすい記載によって克明に記されている。私がチンパンジー研究の初心者だった頃、まさにこの本のグドール博士による説明がチンパンジーの行動理解についての教科書だった。3つ目は集団の消滅に関する歴史的記録であ

る。本書512ページから528ページまで、隣接する2つの集団間の抗争により、一方の集団が消滅した記録が描かれている。ゴディへの襲撃、デヘへの襲撃、チャーリーの死といった小見出しとともに描かれるチンパンジーの戦争は、実際にそこに行ったことがない私でも、現場の光景が目浮かぶようだ。以上のように、野生チンパンジーの行動の多様な側面が、この1冊の本の中に凝縮されている。

ひと口に野生チンパンジーと言っても、暮らしている場所によって振る舞いが異なる。グドール博士が世界で最初に確立した長期野外研究拠点のゴンベでの研究に続いて、日本人研究者が確立したタンザニア・マハレやギニア・ボッソウ、それから欧米研究者が主導したウガンダ・ブドンゴやコートジボアール・タイ森林などのチンパンジーの様子が明らかになってくるにつれて、地域によって異なる文化をもつ野生チンパンジーの姿が見えるようになってきた。原著タイトル「ゴンベのチンパンジー」が言外に示すのは、ゴンベ以外のチンパンジーについても同様の調査と同様の著作が必要である、ということだったのだろう。

実際に、ゴンベの本に続いて、マハレのチンパンジー (The Chimpanzees of the Mahale Mountains)、タイの森のチンパンジー (The Chimpanzees of the Tai Forest)、ブドンゴのチンパンジー (The Chimpanzees of the Budongo Forest)、ボッソウ・ニンバのチンパンジー (The Chimpanzees of Bossou and Nimba) といった本が出版されるに至った。それぞれ出版社が異なるので正確な意味ではシリーズ本ではないのだが、世界のチンパンジー研究者が自発的に引き継いできた実質的なシリーズと言ってもよいだろう。「The Chimpanzees of (調査地)」という題名の本を出すことが、いわばチンパンジー研究の伝統ともなっていて、それぞれの調査地の代表者の責任でもある、ということ言い過ぎだろうか。その発端がグドール博士による本書なのである。

今回は新装版ということで、その内容は1990年発行の日本語訳初版と同一なため、本書評では内容についての言及は大きく割愛させていただいた。1986年の英語版原著発行から30年以上たった今なお、書かれている内容は依然として価値が高く大いに参考になることだけ申し添えておきたい。チンパンジー研究に携わる者に限らず、霊長類の行動研究に関わる方々には必読の書であるし、専門家ではない一般の人にも、野生チンパンジーの姿を知るうえで、そして人間とは何かを考えるうえで重要な知見を語り掛けてくれる本である。

(京都大学野生動物研究センター 平田聡:
hirata.satoshi.8z@kyoto-u.ac.jp)